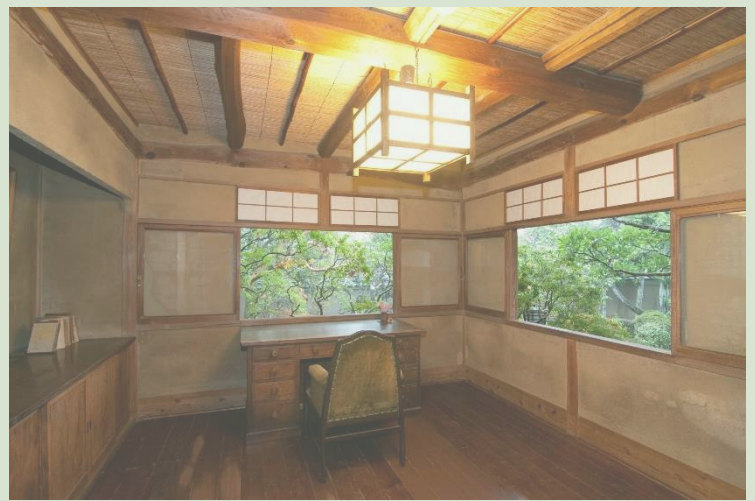


古都奈良、文学と美術と

古都奈良は今なおわれわれを美的世界へと誘います。この講座では、古都奈良が今日に伝えた遺産と、今にみる文学作品や美術について、その魅力を語ります。

古都の美と、近代の文学とを、ともに鑑賞しながら、志賀旧居講座の午後を心ゆくまで味わって頂きたいと思います。



5 月 19 日（月）14 時～15 時 30 分

「古都奈良と日本文化」 呉谷充利 建築史家・相愛大学名誉教授

奈良と日本文化について考えてみます。奈良は言うまでもなく仏教美術の宝庫たる古都です。が、仏教文化はインドにはじまった宗教で日本には無かった精神文化です。この外来の文化を受け入れ、みごとな仏像群を生んだ古都奈良に新たな邦土の日本文化のかたちを見てみたいと思います。偏狭なナショナリズムでもなく、外国一辺倒でもない、日本文化の第三の有りようと言えるこの文化の一形式こそ、日本文化に連綿として流れた精神の意味を語っています。

6 月 16 日（月）14 時～15 時 30 分

「芥川龍之介『竜』一猿沢の池から昇る」 吉川仁子 奈良女子大学文学部准教授

芥川龍之介の「竜」を読みます。芥川は、古典を題材とし、そこに近代的な心理や解釈を加えて多くの作品を作り上げました。

「竜」は「王朝物」と呼ばれるものの中的一个で、『宇治拾遺物語』から題材を得ています。この作品は、芥川本人がマンネリの自覚発言をしていることもあり、あまり高く評価されていませんが、その評価を検証するとともに、芥川が素材となる古典作品をどのように扱ったかを確認し、奈良を舞台とした作品を楽しんでみたいと思います。あわせて、志賀直哉が芥川をどう見ていたかについても目を向けてみましょう。

7 月 21 日（祝・月）14 時～15 時 30 分

「『悲しみよこんにちは』を読むーフランソワーズ・サガンとその時代」 東浦弘樹 劇作家・関西学院大学教授

フランソワーズ・サガン（1935-2004）が 18 歳の時に発表した処女作『悲しみよこんにちは』（1954）はフランスのみならず日本でも一大ブームを巻き起こし、作者サガンを一躍スターダムに押し上げました。17 歳の早熟な少女セシルのひと夏の経験を描いたこの小説は 1957 年にオットー・プレミンジャー監督、ジーン・セバーグ主演で映画化され、当時の若い女性たちはスキャンダラスであると同時に冷徹なまでに自己分析に優れたセシルの物語に熱中しました。

本講座では『悲しみよこんにちは』のストーリーやポイントをわかりやすく説明し、この小説の何が当時の日本人を熱中させたのか、『悲しみよこんにちは』は今日でも読むに耐える作品なのかを考えてみたいと思います。

9 月 15 日（祝・月）14 時～15 時 30 分

「泉鏡花『外科室』を読む」 西尾元伸 帝塚山大学教授

『外科室』（明治 28）は、同時代評によって「観念小説」と呼ばれることになった、泉鏡花の初期を代表する作品です。貴船伯爵夫人が「謔言（うはごと）」を言うからという理由で「麻酔剤（ねむりぐすり）」を拒否し、麻酔なしでの外科手術に臨むという筋立ては、作品の特質でもあり、不自然さでもあると受け止められてきました。しかし近年の研究では、そのような作品の構想は必ずしも鏡花の独創によるものと言い切れないことが指摘されています。本講座では、『外科室』における鏡花の創作手法に注目しながら作品を読み、その魅力に迫ってみたいと思います。

10 月 20 日（月）14 時～15 時 30 分

「奈良のモダン」 松川綾子 奈良県立美術館 学芸員

近代奈良の歴史的文化的状況を作品や資料をもとに紹介し、文士や芸術家のコミュニティの有り様を明らかにすることで、近代奈良の文化風土を探索する。

11 月 17 日（月）14 時～15 時 30 分

「戦後 80 年を迎えて 奈良の美術と戦争」 平瀬礼太 美術史家 愛知県美術館・館長

戦争中の美術は空白期であったと言われることも多いのですが、他地域と同様に奈良においても美術活動は続けられていました。また、空襲などを避けるために疎開した美術品もありました。戦後 80 年を機に、戦争の時代の記憶を風化させないために、あらためて戦中という非常時の美術活動を見つめ直したいと思います。

<参加費>各回 500 円 入館料込 定員 25 名(申込先着順)
<申込先>学校法人奈良学園セミナーハウス志賀直哉旧居
奈良市高畑町 1237-2 TEL/FAX:0742-26-6490
E-mail:seminar@naragakuen.jp



志賀直哉旧居 HP